

さくらんぼの摘花と摘果を組み合わせた着果管理方法

山形県農業総合研究センター園芸農業研究所

研究のねらい

近年、温暖化の影響で果樹の春の生育が早まるとともに、晩霜害の発生頻度が高くなっており、さくらんぼの高品質生産のために行っていた摘芽作業（花芽を取って、花数を制限する作業）が実施しにくい環境になってきている。また、労力不足が顕著になる中で、安定したさくらんぼ生産を持続するため、摘花と摘果を組み合わせた着果管理技術を開発した。

研究の成果

- ① さくらんぼの着果管理を、摘花と摘果を組み合わせることで、摘果のみでの管理よりも効率的に実施できる（作業工程は図1、摘花の様子は図2のとおり）。
- ② 摘花は、摘芽よりも結実が良好で、人工受粉を行うことで必要な結実数が得られる（表1）。
- ③ 摘花と摘果を組み合わせた着果管理は、摘果のみで管理するよりも果実が大きく、着色が良く、糖度が高くなる傾向がある（表2）。
- ④ 摘花作業は、機械（ヘッジトリマー）を用いると作業時間を短縮できる（表3）。
- ⑤ 開花期に、花の状況（凍害、晩霜害による雌しべの枯死状況など）、天候と訪花昆虫の活動状況を良く観察して、十分な着果量が見込めない場合は摘花を実施しないで摘果で着果管理を行う。

	2月頃～開花前	開花始期	5分咲き	満開期	落花期	実止まり期	
摘花と摘果を組み合わせる方法		人工受粉 ※できるだけ回数を多く、少なくとも5分咲きと満開期の2回		摘花 ※満開期以降に結果枝の下側に着生した花を中心に摘花（40～50％程度）		摘果 ※実止まりが分かったら目標の着果量に摘果（花束状短果枝当たり2果程度）	
通常	摘芽 (3芽程度残す)	人工受粉				摘果	

図1 作業工程

果実品質が劣る結果枝の下側を中心に50％程度摘花した場合

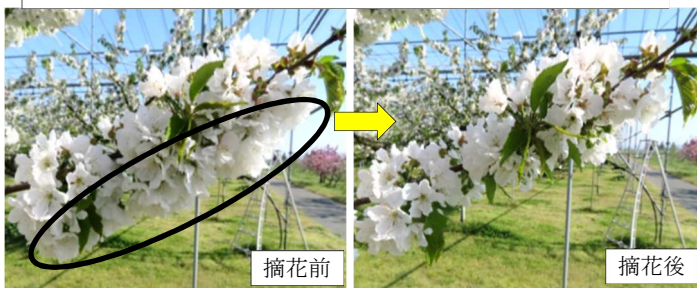


図2 摘花の例

表1 「佐藤錦」の花束状短果枝当たり結実数（令和4～6年の平均）

着果管理	人工受粉	結実数/短果枝(果)				
		R4	R5	R6	平均	
摘花	あり	2.0	2.4	2.5	2.3	
	なし	1.7	1.6	2.0	1.8	
摘芽	あり	1.1	1.3	1.2	1.2	
	なし	0.8	0.9	0.9	0.9	
摘芽・摘花なし	あり	1.7	4.9	3.5	3.4	
	なし	1.6	2.4	1.7	1.9	

「人工受粉あり」は満開期までに2～3回実施

摘芽は、3芽に摘芽

摘花は、R4が満開1日後、R5が満開4日後、

R6が満開3日後に実施

表2 「佐藤錦」の果実品質（令和4～6年の平均）

着果管理	1果重 (g)	果皮着色 (%)	糖度 (Brix)
摘花＋摘果	8.1	82.3	22.2
摘芽＋摘果	7.8	80.3	21.5
摘果のみ	7.6	77.9	20.2

※結果枝の下側を中心に40～50％程度摘花した場合

摘果は花束状短果枝当たり2果を目安に実施

表3 10a当たりの着果管理作業時間（令和5～6年の平均）

作業内容	摘花時間 (時間)	摘果時間		合計作業時間	
		(時間)	摘果のみ比(%)	(時間)	摘果のみ比(%)
ハサミで摘花＋摘果	34	24	29.7	57	77.1
機械で摘花＋摘果	24	31	42.2	56	76.3
摘果のみ	—	77	—	77	—

※「佐藤錦」で試験、作業時間は試算値

結果枝の下側を中心に40～50％程度摘花した場合

問い合わせ先：果樹部 TEL：0237-84-4125 e-mail：yenken@pref.yamagata.jp